

かごしまの昔話

むかしばなし

新五郎話



明治・大正時代のころ、本城（伊佐市菱刈）に、新五郎というおもしろい人がいたそうです。誰も思いつかないような突拍子もない言動で周囲を苦笑させることが度々でした。

新五郎には永野金山（さつま町）で働く友達がいました。この金山は、今はもう閉山してしまいました。採掘が続いていた時は人口も多く、春と秋に行われるお祭りは、たいそうにぎわいました。新五郎は祭りのたびに出掛けていき、友達の家を次々と訪ねて

焼酎を飲んでおりました。それで、友達が、

「おれたちも、今度、下手水天祭りに行って、戻りには新五郎方で、いっぺ（たくさん）飲みたい」と言いました。水天祭りというのは、十一月二十八日に行われる水天神社（伊佐市菱刈下手）の例祭のことで、伊佐地区最大のお祭りで、近郷近在から多くの人々がやってきます。

水天祭りの日になりました。新五郎が、「今日は金山の友達が寄つてねえ」と言うと、



「そら、大変じゃ。焼酎が足らんかもしれん」と、妻は困った様子です。新五郎は、

「そうか、それなら、おれに何か考えがある」と言い、座敷に水がめやとつくり、すり鉢、茶碗までありとあらゆる瀬戸物を並べておきました。

昼過ぎ、金山の友達が数人訪ねて来ました。

「おう、よう来てくれたね。さあ飲んでくれ。もう、盃なんぞ面倒じゃ」と、新五郎は井に焼酎をつぎました。そして、

「おはんたちは、こけ寄ったからには、こん座敷の焼酎を飲

み干さんといかんぞ。ずるつ

（全部）飲み干さな、戻さんでね」と言ったのです。友達は座敷いっぱい並んだかめや、さまざま瀬戸物を見て驚きました。

「こげな所に長居をすれば大変じゃつど。何をされるかわからん。もう戻つが」と焼酎どころかお茶一杯も飲まずそそくさと永野に帰って行きました。かめや、すり鉢の中に入っているの水とは思いませんでした。

（原話 伊佐市祝田栄『伊佐民俗』第二号）